
天使の羽

しみちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の羽

【Nコード】

N8650D

【作者名】

しみちゃん

【あらすじ】

絶望の底に居た千里。彼女の掌にある日羽が舞い降りた。その羽はどんな願いも叶えてくれるものだった。

空から降ってきた一枚の羽。

それは天使の羽。

羽を掴んだ人は幸せになれる。

そんな噂を聞いたのは幼稚園か小学校の低学年位の時だった。

松井千里。

それが私の名前。

さつき私は長年付き合ってた彼氏に振られた。

（俺、他に好きな奴居るし。）

そんな最低な理由。

生きていても何も良い事無い…

そう思っていた時だった。

私の掌に一枚の羽が舞い降りて来た。

その時頭を巡った一片の記憶。

—天使の羽—…

確か…幸せになれるんだっけ…？

所詮噂。

それも十年程前に聞いた。

真実なわけが無い。

誰もがそう思うだろう。

確かに違った。

天使の羽は…

もつと恐ろしい物だったのだから…。

綺麗な白い羽。

本来なら汚いと思って捨てるのだけど、この羽だけは捨てられなかった。

何故か、気が着くと家に持って帰っていた。

疲れた…。

今日は色んな事があり過ぎた。

そう考えているうちに私は意識を手放した。

夢を見た。

綺麗な純白の羽を背にした一人の女の子。

少女は私に訊いた。

『貴方は何を望む？』

あいつを…私を振ったあいつに死んでほしい…。

『ならその望みを叶えてあげる。』

そう言って少女は消えた。

途端に景色が黒く一変した。

そして黒の中で、あいつが首を吊っていた。

私の後ろで少女が笑っていた。

鈴のように甲高い声を震わせて。

そこで夢は終わった。

目覚めると日は既に昇っており、時計は正午を指していた。

参ったな…寝過ごした。

私は今日大学をサボることにした。

どっちみちこの腫れた目では行けっこなかっただろう。
でも行かなくて正解だったのかもしれない。
あいつが大学で首を吊って死んでたんだから…。

私が望んだから…？

そんな思いが脳裏をよぎった。

しかし夢の中だ。

偶然や予知夢の類だろう。

そう思って私は出かけた。

あいつの葬式にも出た。

でも…不思議と涙は出なかった。

憎しみしか無かったから…。

）

ふいに携帯の着メロが鳴った。

ディスプレイには『新着メール一件』の文字。

知らないアドレスから。

だれかアドレスを変えたんだろうか？

そう思ってメールを開いた。

本文は無く、画像が添えつけてあった。

その画像は信じがたいものだった。

なぜなら…

私があいつを大学の天井に吊るしている写真だったのだから。

どうせ悪戯だ。

何度かあつたし。

気にせずにその画像とメールを削除した。

今日も一日が終わる。

いつも通り御飯を食べて、お風呂に入って眠る。

寝る前に一つ思った。

『あいつとの思い出が全て消えればいい』と。

次の日、私は大学へ行った。

一人の女の子が私に話しかけて来た。

『佐倉若葉』

十数年来の友達である。

「千里…。大丈夫だった…？」

何が？

「若葉は何のことを言っているの？」

そう問い返すと若葉は目を見開き、そして、『辛かったね…』と言
い残し去って行った。

何か…何か忘れてる気がする…。

そう。

『あいつ』の記憶をなくしたのだ。
いくら考えても思い出せない。
まるで…

その時間が存在しなかった様に。

自分の手には以前舞い降りて来た羽。
でも少し違う。

心なしか純白だった羽が黒くくすんでるように見えた。
そして、何故か友達の視線が冷たく感じた。

大学から帰る途中、駅前の本屋に寄った。

欲しい小説の続きが出ていた。

買おうと思って財布の中を覗く。

でも今は給料日前。

バイトと言っても所詮家庭教師。

たいした給料じゃない。

そのせいで本を買うお金が無かった。
本はまた今度にしようと思めて家に帰った。

今日はバイトの日。

生徒の家に行く。

この生徒はそうとう出来が悪く、疲れる。
死んでくれたら…。

次の日、家の電話が鳴った。

生徒が車に撥ねられて死んだらしい。

もしかして…この羽は願いを叶えてくれるの…？

じゃあ、こないだの本が欲しいな…。

そう思うと目の前に欲しかった本があった。

くっ

携帯が鳴った。

この間の知らないメールアドレスから。

やはり本文は無く、画像が添えつけられていた。
すると、本を万引きする私が写っていた…

ありえない。

何より私は家から出ていないんだ。

万引きできるはずが無い。

やっぱり悪戯だ。

性質悪いなあ。

私はアドレスを変えた。

変更した旨を書いたメールを送る。

すると全てエラーとして返ってきた。

何で…？

こんな事、小学校でハブられた時以来だ。

寝て忘れようと思って寝た。

何時か夢に出てきた少女が微笑んでいた。

『君は何を望む？』

また聞かれた。

「友達が欲しい。」

そう言うともた景色が一変し、真っ暗になった。

暗闇の中、市一つの光があった。

光の中に若葉が居た。

彼女は微笑む。

次の瞬間、彼女の首は地に落ちていた。

暗い景色が赤に染まって行く…。

私に問うた少女が微笑んでいた。

私は叫んだ。

「若葉を殺すくらいなら友達など要らない！！」

私はそこで目が覚めた。

手に羽を握り締めていた。

羽は拾った時とは違い、随分黒くなっていた。

そこで初めて気が着いた。

私の頬に涙が伝っている事を。

私の着ていた服が真っ赤に染まっていた事を。

私の隣に若葉の首があった事を。

夢だ。

夢に違いない。

キッチンの包丁を手を取った。

夢である事を証明するかの様に私は自らの首を切った。

次に目が覚めたのは病院だった。

医師や警察の説明によると、私は若葉と一緒に家に居り、何者かが家に入って来た。

そして若葉と私を殺そうとしたらしいが、私は死ななかったらしい。あれは…夢だったのか？

いや、そうとは思えない。

夢にしてはリアルすぎだ。

一体何なんだ…？

この事をきっかけに沢山の奴らが私に良い寄るようになった。

『友達だ』

全員が全員そう言った。

所詮上辺だけだろうが、私は嬉しかった。

退院して初めて携帯を開いた。

『新着メール一件』

そこには私が若葉の首を刎ねている写真があった。

嫌だ。

ありえない。

何で私が若葉を殺す！？

一体何の…！？

私は何をしたって言うの？

ただ聞かれた事に答えて、只望んだだけじゃない！！

全部夢だ！

私の前から全て消えろ！キエロ！！！！

クスッと笑う声が聞こえた。

後ろには夢に出てきた少女が居た。

『その望み、叶えてあげる。』

少女の顔は歪んでいた。

黒く、醜く、歪んでいた。

少女はニヤリと笑うと私の首に手をかけた。
苦しい。

華奢な腕からここまで強い力が出るものなのか？

景色が霞み、やがて光が見えて来た。

その中に若葉が居た。

（助けて…）

若葉に、私が殺した親友に、助けを乞うた。

その助けを裏切る様に若葉は歪んだ笑みを浮かべ、私の首を絞めた。
意識が途絶えた。

天使の羽。

それはどんな願いも叶えてくれる。

でも願いを叶えるにはそれ相応の代償が必要。

貴方の手に羽が舞い降りたら気をつけて？

ほら、貴方の後ろに少女が居るよ。

使い方を誤らないで？

人は浅ましいから無理でしょうけどね。

ひらりと舞い降りた羽。

『これ…何…？』

この人の運命はどうなるんでしょうね？

(後書き)

読んで下さってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8650d/>

天使の羽

2010年10月9日23時34分発行